

美術教育で「教えられること」と

「委ねること」

福田好孝

本庄隆志

十河幸喜

上野秀実

はじめに

今回の美術教育分科会には参加者が十五名、レポート数が九本となった。参加者数は例年並みではあったが、レポート数は昨年を上回り活発な論議があり交流があった。またこの分科会の宝とも言える子どもたちの作品が多く持ち寄られたことに感謝している。

討議は図工・美術教育の根幹を成す要件について貴重な内容となった。

ひとつは現場における図工・美術教育が専任教員の不在や授業時数の減少などのマイナス要因で子どもたちの表現力の発達が保障されないまま放置されているという現実があるということ、さらに現行の学習指導要領の施行により時数削減、造形あそびの小中学校から高校と高学年への拡大化により幼少期からの普遍的系統的な造形体験が希薄になってしまった子どもたちへの指導が、専任の教員であっても困難になってきている状況であるということである。

討議は大学で学校教員を目指す学生への講義記録である梅津レポートで深まりがあった。図工・美術教科では教師が子どもたちに「教えられること」と子どもたちの感性に委ね「教えられないこと」は何かを根気よく選り分け確認することが大切である。多くは混同し、教師の主観的な指導になっていたり、また「〇〇法」「〇〇式」などに見られる描き方、上手い絵を描かせる方法論を安易に取り入れたり、恣意的な指導に陥ったりはしていないだろうか。ここにこそ合研で私たちの実践・研究を持ち寄り、討議し検証することの意味がある。

子どもたちの造形活動は単に形づくり、ものづくりにとどまらない。身の回りや現実をより良く変えていこうとする心を育て、人としての生き方に関わり、豊かな人間形成を促すものである。「人格の完成」のための大変重要な活

動であることを改めて確認する。

伝承される卒園記念制作「生活をつづる木版画」

深川市 多度志保育園 齋藤 恵

二十二年間多度志保育園に受け継がれたベニヤ板三枚分もの大きさの木版画の実践である。齋藤先生はボランティアとして現職時代から関わり、子どもたちが生き生きと作品制作に向かうための様々なアドバイスをしてきた。卒園制作が始まる一月上旬、齋藤先生は体調を崩し、長期入院を余儀なくされた。しかし「卒園記念巨大木版画」は今年も途切れることは無く、園児の父母や職員も子どもたちを援助して、齋藤先生が不在の中でスタートした。版画制作が多度志保育園では一大文化行事としてかけがえのない行事に成長していた。今年度は障害をもった子どもが在籍した。版画制作は彫刻刀などの用具を使用することから作品完成を危惧される面も多かった。しかし、あらかじめ齋藤先生が園児の手に合うように工夫を重ね、金物店で刃のみを購入し、にぎりの部分を自作し手作りすることで克服出来たという。また常に切れ味を損なわないように考案された砥石など、創作のおもしろさを存分に味わわせるための子どもたちの手となる道具づくりや版画の彫りや刷りの技術面だけでは無く、作品のテーマとなっている「みんなの

畑」で人物や物が重なり合うことで画面に奥行きを持たせるなど子どもたちの自由で自発的な造形力を引き出している。園児の作品には圧倒的な存在感や迫力が生まれる。それは輝くような楽しい生活をベースにした子どもたちの感動があるからだ。

小学校教師を目指す若者たちとつくる

「図画・工作科指導法」の授業

國學院大學北海道短期大学部

兼任講師 梅津 守

十数年前現職のころ本分科会の重要な柱を担っていた梅



津先生は現在滝川市にある國學院大學の講師となつてい
る。小学校教員を目指す大学生への図工指導法の講義の
記録である。

講義が始まるに当たつて、シラバスを提示した。そのほ
とんどが実技授業ではなく図工科教育法の論文購読や理論
とその意見交換、模擬授業といった講義のスタイルに学生
の間から不満の声も聞こえてきた。しかし講義が進むにつ



れて子どもたちの個性
的で感動的な表現を保
障する指導法、優れた
実践を学ぶことによつ
て学生らは教師が教え
られること、教えら
れないこと、作品づく
りのみでは子どもの創
造性は育まれない。子
どもたちとともに学び
成長していける教師を
目指さなければならな
いと気づきの講義とな
った。

図工指導法に求めら

れているものは何か。それは学問に根ざした普遍性である。
「子ども自身が発見し工夫し創造しなければならぬこと」と
「教師が手だてを組んで教えなければならぬこと」を
根気よく選りわけて教えなければならぬことを正しく、
しかも順序立てて教えるような授業の形態と内容の研究を
課題の一つとして押さえなければならない。

梅津先生の講義は改めて分科会の研究の柱を再確認する
もので、図工美術を指導する立場として押さえておかなけ
ればならない貴重な内容であった。

絵巻物「鳥獸戯画」の鑑賞

枝幸町立枝幸中学校 小林 清一

枝幸中学校を会場に、枝幸町教育研究会主催の教育研究
会が行われた。研究主題「すべての生徒に学ぶ喜びを実感
できる授業を」のもと枝幸中学校の全学級が公開授業をす
るなかで、小林先生は二年生の美術鑑賞授業で十二世紀の
京都高山寺に伝わる「鳥獸戯画」をとりあげた。

生徒は説明を聞いて見通しを持ちながら制作してゆく取
り組みに弱さがあり、落ち着きのない生活姿勢であるが、
生徒に親しみのある漫画のルーツともなること。「鳥獸人
物戯画」は動物の様々な姿態を借りて描いた人物風刺画で

あり、わかり易い物語性のあるものであることなどから生徒の学ぶ意欲を喚起させるもので、最適の教材であると判断した。生徒への提示の仕方もち巻物を一コマに断ち切られた場面ではなく、物語の流れが感じられる様にビデオ撮影してBGMを流した。生徒には一場面の効果音や台詞をイメージさせたが時間軸の違う巧な表現が存在することに気付いた。さらに小林先生は当時の人たちが絵巻物を味わったように巻き取り経験をさせたいということで小型であるがコピーをして巻物を生徒数分作って体験させた。意外にもしつかりと鑑賞姿勢であり手応えのある実践となった。今後この実践が鑑賞教材でどの様に転化したか検証も含めた報告を期待したい。

小林先生からは二本のレポート報告があつた。二本目は「地域・学校とのとりくみにつながる教材」学校を挙げてとりくんでいる「よさこいソーラン」は生徒から圧倒的な支持をうけ文化祭の一大行事として展開されていた。美術の教育実習生を迎えるにあたり授業の組み立てを学校の取り組みである「よさこい」と連動させ、生徒のくらしつきを期待して衣装のデザインと色彩指導を展開した。無味な知的指導に偏りがちな色彩指導を生徒の興味関心に根ざした新しい切り口を見せてくれた。

「鑑賞5」^{マイナス} 一 作者や時代背景に光を当て、

作品の背面をみる鑑賞」

美深町立仁宇布小中学校 茶谷 裕樹

住み慣れた宗谷から転勤され、新たな生活の地での実践報告である。

今次報告も然りだが、一つの鑑賞という教材をつくりあげるまでのプロセスには、感嘆ということばがふさわしい。図書館、美術館、博物館等々、インターネット検索はあくまでも補助的な扱いで、自らの五感を活用し実体験による題材づくりを柱にしていることが、茶谷実践の最大の魅力とは言えないだろうか。

異動による様々な要因から、「鑑賞授業」という報告は一旦休憩（一）し、六月から十一月までに参加した美術教育に関わる四つの研究会報告。それらの研究会での雰囲気伝える写真を添え、感想を述べておられるが、全てを受容し、一つひとつに、今までの自分を振り返り、これからあるべき方向を模索していることが、その紙面の最後に記された、今までの鑑賞授業実践を列挙したことに伺い知ることができる。

ご本人曰く「一つ覚えの鑑賞……」「一旦休憩……」とは言うものの、年度始めにベラスケス「ラス・メニーナス」、次

の風景写生の制作につなげることも念頭に、長谷川等伯「松林図屏風」の鑑賞授業を行っている。鑑賞を単発で終わらせることなく、次作や生き方に波及させるべく意図を持って臨むからこそ、一歩も二歩も制作者の周辺や時代背景、そして生き様へと踏み込む必然が生まれる。そこを、決して指導者側から一方向の押し付けではなく、調べ活動にもつなげ、生徒自身にも投影させる要素を醸し出す。

地元生がほとんど居ない新しい住人がいる山村留学の地だからこそ、一人ひとりの心の肥しとなるべく、表現と鑑賞の両輪をまわす実践が必要とされるものと確信する。レポートのサブタイトルに、教材に寄せる想いと美術教育に対する自他への決意が込められた報告である。

水墨画「鳥獣戯画（甲巻）」について

網走市立第三中学校 成田 悠

日々必死。初任者として全校四五六人、十三学級の美術を一人で担当しておられる。『奮闘』ということばが相応しい報告である。

一学年から三学年にわたる題材は、平面・立体・鑑賞の三領域を網羅した配列になっており、学年進行と共に考えるべき幅の広がりや、技術的に難度を増した配列になっている。前任の先生を参考に自分なりのアレンジを加えたとい

う。そこには、指導者自らの美術に対する想いがあるからこそ。しかしながら、同じクラスが週に二時間あるにも関わらず、一時間の細切れで扱われていることが明らかになり、美術教育で何が育まれるのか現場での理解が進むことを切望する。

そのような状況下、二学年での共同制作（絵巻物）での制作過程や悩みを交流。一学年から常に個のものを創ってきた中で、一クラス一つの絵巻物を完成させることは、個になれる場所での個を見つめてきた展開は双方にとつて、困惑・葛藤・試行錯誤の連続だったのではなからうか。自分にはない隣人の考えを肯定し、作品を創り上げていく中で、人と作品の関わり方にも波及する。絵巻物故の、時空・間・余白・連続性をも追求するとなると尚更である。個人では解決できるだろうか壁に当たり人との関わりが必要となる。認め合いによる作品づくりが進行し、分業化も進むというもの。共同制作に入る前、絵師の線描による模写を全員行っているが、前段で障壁画や屏風画を含む水墨画の鑑賞授業を行っている。導入部を大切に扱い本制作に向かわせているのである。完成の折にはその作品を鑑賞し合うという。作品づくりに関わった全ての要素を振り返ることに繋がる丁寧な取り組みである。

鳥獣戯画を忠実に再現するか、学校生活などの身近なものに変えるかと迷いがあるというが、「一〜三学年全員に美術で迫るというメリットを活かして、繋がりのある授業をしていきたい」という考えをお持ちのご本人である。発達を保障する教科である故の、更なる奮闘を期待する。

「2009・毎日の美術教育実践から」

岩内高等学校 福田 好孝

「鉛筆で黒くしていく作業は、高校レベルの作品制作への第一段階なのである」絵画的表現を経験することの少ない子どもたちに、いかにして「絵」を描かせるか。次作へのステップアップも目指しつつ、本来あるべき美術教育の姿勢をブレることなく、自他に揺さぶりをかける実践である。

今次報告も、目の前のものを描くという仕事を大切にしている。生徒自身が持っている絵具チューブを机の上に置かせての鉛筆デッサン。単元にちなんだ制作案内「ART IWANAI」が配布される。それは、単なる know How ではなく、纏わる作家の紹介や、制作を続ける中で揺れ動くであろう心の動きもことばにし紹介している。「大人が当然知っているだろうと思われることでも、知らないのが子どもたち」と常識とは見ず体験させる。鉛筆の筆圧の調

整によつてうまれる明暗（グラデーション）、その明暗から創る三次元（立体）。これらの体験を経、目の前のモチーフを描くという系統性を持たせた造形への導き故である。「ぎっかけや興味をもたせ、持続させるためにはいかにあるべきか」ご本人はしつこい要求と語っているが、粘り強い寄り添いがなければ造形の仕事には辿り着けるものではなからう。

しかしながら一瞬、目や耳を疑った作品が紹介された。自作のワークシートに円を予め印刷し、そこに鉛筆で明暗をつけることで球体にみせる取組みである。球体（立体）の捉え方としては本来的ではないと解つてのこと。「果たしてこのやり方がいいものなのか」と参加者に問いかけた福田氏。生徒の実態を捉え課題を模索した結果に宛がったのである。この方策は前述した絵具チューブの鉛筆デッサンにつなげるという明確な意図があり、鉛筆体験による立体描写への「ぎっかけづくり」として有効に作用したと作品から伺うことができる。

「日頃の実践から」というタイトルで、ここ数年参加され、「これといって、目新しいものはなく…」とレポートや作品の紹介に入る。そこには、今回のように本来的ではないと承知の上で、取り組ませることも時には必要な手段であることも認識させられた。制作を続ける中から、自分

を見つめさせ自己を獲得させる。という考えを持ち「生きる力は美術教育でつけられる」と信じて実践を続けておられる福田氏ならではの報告である。



美術を学ぶとは―芸術教科科目の教科性を考える―

俱知安高等学校 本庄 隆志

芸術教育は人が生きていくために絶対必要な根元的なものである。それは、時に失敗や敗北から「学び」、さらに高みを目指す復元力のあるジャイロコンパス（高速回転す

るコマの回転軸が常に天空の一点を指す作用）のような存在だと考えてもよい。芸術教育が、学校教育の中に存在する意義とは、創造的で互いに協同し、成長の喜びを分かち合える「学び」の原点であると明快に論じている。この分科会参加者共通の思いを確認できた。

本庄実践は、この考えを基本にゆるぎない。また、その指導の丁寧さ、緻密さには感心させられる。子どもたちに提示する教科通信や資料は、さまざまな角度から切り込まれており優れている。この姿勢は確実に伝わり、子どもたちの真剣な取り組みにつながり、質の高い作品制作にもつながっている。

鑑賞では、地域の画家の作品を収蔵し公開している小さな美術館に引率、作品や画家の人生に触れさせている。鑑賞後の子どもたちを評して「芸術の香りを纏ったいつもと違った生徒の姿がある。穏やかで充実したい顔をしていて」と表現した一文がある。芸術を学ぶことの大切さを教え、気づかせている。

他の教科とは違う「学びの本質」を美術という教科は包含する。命を慈しむ平和への願い。ものと自己に対峙し、格闘し、仲間と協同しながら形を作り上げていく、共感しあいながら、同じ時間を共有するとして、美術による自己確立、人格形成の可能性にも言及している。深く考え、追

求すべき課題である。



「鍊金（X）術・練動術」

江差高等学校 十河 幸喜

既成概念にとらわれない自由な発想と子どもたちを見つめる視点を大切にして、エネルギーッシュに実践を続けている。感心するのは自分の足場である檜山の教育研究会に毎年参加されていることである。その地域の小学校、中学校の図工・美術教育の実践を学び、その延長線上にある高等学校の美術教育につないでいこうという考え方が十河実践

の根幹になっている。

実践報告は、「コラーージュ」から発想を得て、「ペンによる点描」作品に昇華させる高校一年生の取り組みである。

「コラーージュ」の材料は、美術教室に大量に置かれてある過去の美術教科書というのも思い切ったものである。確かに美術の教科書はコラーージュに適した図版がたくさんあり、印刷も美しい。しかし、それを切り刻むことには抵抗がある。それをやつてのけることが、十河実践の真骨頂である。子どもたちの自由な発想、取り組みにもつながっているのだから教科書も本望であろう。

「コラーージュ」からの発想は、はてしなく広がり、教える側の予想をはるかに超え、ねらいでもある「ありえない世界」へとつながっている。豊かな感性を引き出す実践の裏側には、子どもたちの取り組みに注がれている指導者の曇りなき眼差しがあり、日常の弛まぬ試行錯誤や研究がある。

十河実践には、子どもたちの可能性を引き出そうとするしつかり練られたしかけがある。「子どもたちを信じて、美術教室で五感を使いながらウロウロする」とのこと、真摯な姿勢である。

創作絵本の取り組み

釧路江南高等学校 上野 秀実

時間割編成上、実習教科の時間を連続させて授業展開できない単位制高校での実践報告である。二時間連続で作品制作ができない状況下で相応しい教材として取り上げたのが創作絵本制作である。現任校では、伝統的に絵本制作に取り組まれていた長い歴史が土台にあり、それをさらに発展させ、子どもたちの実態にもうまく合致し、成功している。

絵本には、子どもたちそれぞれの思い、技術的な持ち味を生かした表現を柔軟に受け止められる懐の深さがある。作品を多くの目に触れさせることも可能な展示の機会も含め広がりのある教材として考え、また、絵だけでなく写真やコラージュなどの表現も取り入れやすいものとして「映像メディア表現」としての可能性もさぐっている。

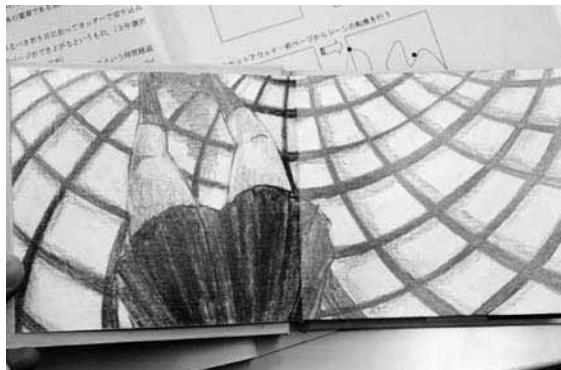
創作絵本作品は、どれも魅力的で完成度も高い。子どもたちが置かれている今日の状況、内面世界を見事に表現された作品も多い。導入部分から完成までの適切な、丁寧な指導も制作意欲喚起に結びついていることも見逃すことができない。

なんといつても上野実践の素晴らしさは、子どもたちの制作した作品を慈しむ姿勢にある。完成した創作絵本を賞

賛し、その絵本の内容にふさわしいデザインを施した帯を一点一点付けてあげている。完成まで至る子どもたちの苦労や歴史を温かい視線で見続けているからできることである。子どもたちを見つめる視点、視線をいつでも研ぎ澄ますことを大切にしたい。

まとめ

美術教育を取り巻く状況の厳しさは変わることなく続いている。この分科会に集う全道からの参加者の中には美術教育の専門ではない場合も多く、絶えず研鑽を積みながら日々の授業で生徒と向き合っている。そこで展開される授業は美術専科の教師では気づかないような展開内容であったり、子どもたちの心を惹き付けるような工夫が随所に見られ素晴らしいものである。加えて、保育園から大学ま



での子どもたちの発達に沿った研究を進めて行けることは個々の活動に終止せず、優れた実践を共有し再度現場に戻って授業に活かされるのである。分科会の会場にはたくさんの作品が持ち込まれ、瑞々しい感性が育まれて行く様子を目の当たりにすることができた。私たちはこの子どもたちの表現を保障して行く義務があり、そのための研究を絶えず行わなければならない。感性や感覚といった情緒的な側面に沿いつつ、表現のための手段たる技術や方法を美術教育の普遍性と捉え、積極的に授業を通じて子どもたちに伝えて行く必要性を今次分科会で改めて確認したと言えるだろう。今回収穫できたことを1年間という時間を経て現場でどのような成果が得られたのか、次年度の分科会でそれを検証し研究をさらに深めて行きたい。

(岩内 高校)

(倶知安 高校)

(江差 高校)

(釧路江南 高校)